

いかに平和を創出するか

沖縄県立那覇国際高等学校二年 濱元 志帆

私がこのテーマに至った理由は祖母との電話のやりとりであった。新型コロナウイルスが流行しているこのご時世で、電話は祖母との唯一のコミュニケーションツールだ。沖縄でも続々と新型コロナウイルスの感染が広がったため、八十になる祖母がとても心配で、祖母の近くに感染者はいないか、外出は控えているのか、そういった不安しか頭になかった。しかし電話をかけてみると、祖母は私の心配はよそにとでも元気そうだった。「今は大変だね」と私が言うと祖母は、「今は幸せな方だよ、だって家は残るだろう、食べ物だってある」そう言ったのだ。その言葉を聞いて私は闇夜にともし火を得たような思いを感じたと同時に、やり切れない複雑な感情になった。考える間もなくその言葉が、祖母が幼い時に体験した戦争のことを言っているのだとわかった。普段あまり私の前で戦争の話をしていない祖母の口から出たその言葉は私に、平和について考えなければならぬ、という強い使命感を与えたように思う。そして、いかに何気ない日常が大切なのかということを、どんなニュースを見るより私にとって、その祖母の言葉が痛切に感じさせた。また、人の命がウイルスではなく同じ人間によって簡単に奪われた戦争の悲惨さを今一度考えさせる機会を与えた。

戦争は絶対あってはならない、世界平和を目指そう、こういった考えが多くなりつつある今の社会でもなお、地域紛争を含む戦争といった「平和」とは言えない状態がなぜ続いているのか。これは本当に究極の問題で、きつと簡単に誰かが答えを言うことはできないのだろう。

平和を求める人々の多くは国家権力を批判する。国家こそが戦争を引き起こす原因だ、ということが理由なのだ。では、平和的な政府をどうやって人間社会の中で創り出し、維持すればよいのか、ということが大きな課題となる。プロイセン王国の哲学者であったイマヌエル・カントは、自身で著した『永遠平和のために』という政治哲学の著作の中でこう語った。「現実世界では永遠平和状態を達成することは不可能に近い。

しかし、到達できないからといって最初からやらないのは、完全に道徳的にならないからといって道徳的な生き方を心がけないのと同じ。大事なのはそれを目指すことだ」と。私はこの考えこそがあるべき国民の姿、私たち一人一人に求められる姿勢なのではないかと考える。

あなたはもし明日戦争が起きる、と急に言われたら何と答えるだろうか。国のためなら命を捧げてもかまわないと言えるか、それとも国がどうにかしろと国家権力を責めるか。私だったら、明日戦争が起るなんてありえない、そう思うだろう。私は戦争のない平和な沖縄で生まれ、今まで命の危機を感じることなく生きてきた。戦争体験者の祖母がいるにも関わらず、戦争のことを詳しく知っていると胸を張って言えない。しかし実際、私のような若者が多くなっているのも現状なのではないか。今の若者にとって「戦争」という言葉はただの歴史にあった点でしかなく、今を生きることに精一杯になり、現在起きている他の国の紛争にも目をむっっているように思う。これが今の社会、今の日本が抱える本当に大きな課題なのではないか。

そして、新型コロナウイルスによって今までの、学校に行って友達と会う、といったあたり前だったものが簡単にあたり前と言えなくなった今が、この課題を少しでも解決に向ける大きなチャンスだ。それは、焚火に触れると火傷をするように、自らの痛みを通じて理解する危険は鮮烈だが、それに比べて机上で思い描く正義は安易なものに思われることと同じだ。

いかに平和を創出するか、ということをして他人まかせになるのは決してあってはならない。実際に地上戦が繰り広げられた沖縄で生きる県民として、原爆が落とされた日本で生きる国民として、戦争はどんな理由があっても起こしてはならないと主張する義務が私たちにはあると考える。そして戦争体験者の記憶を次の世代に繋げなければならぬ。「いかに平和を創出するか」この永遠の問いを熟考しながら。